



図書館だより

2013.1
No. 19

長崎県立大学佐世保校附属図書館 〒858-8580 佐世保市川下町123
TEL 0956-47-2191(代表) <http://sun.ac.jp/lib>

ロンドン大学のSOAS の事情

尹 清 洙

(経済学科・准教授)

私は、本学から2011年10月から1年間、ロンドン大学のSOAS (The School of Oriental and African Studies) で在外長期研修の機会を与えられた。ロンドン・オリンピックとも重なり、女子バレーや男子サッカーの現場での応援などの思い出もいっぱいあるが、今回は大半の研究時間を過ごしていたSOASとその図書館について紹介したい。

SOASはロンドン大学の構成Collegeとして1916年に創立され、1941年に現在のRussell Squareにキャンパスを移している。大英博物館から北へ徒歩5分という至近距離にあり、ロンドン大学の本部であるSenate Houseに隣接している。

SOASはその名が示すとおりアジア・アフリカ分野に特化した高等研究機関で、東アジ

アに関して言えば、日本研究センターが1978年に、韓国研究センターが1987年に、中国研究センターが1992年にそれぞれ設立され、それぞれの研究センターには数十人規模の研究者が所属している。英国の高等教育機関としては唯一アジア、アフリカ、中近東の地域研究を専門とし、すでに世界屈指の研究規模を誇っている。法律・社会科学部、人文・文化学部、言語文化学部の三つの学部があり、5,400名以上の学生の中でその半数ほどが130以上の国・地域からの留学生であり、国際交流は本当に目を見張るものがあった。

Denys Lasdun卿によって設計され、1973年にオープンされた図書館には現在120万冊以上の書籍とスペシャル・コレクションというコーナーがあるのが特徴的であった。スペシャル・コレクションには例えば日本の江戸時代の刊本や図録、中国の清の時代の税関記録、古文書や地図などの希少なものが数多く収蔵されていて、これらの地域研究においては当館でしかできないアドバンテージを持っていた。



(出所：ウィキメディアより。)

当館は地下1階、地上5階の構造で地下には公文書やスペシャル・コレクションが収められていた。1階の入り口には受付・貸出返却デスク、窓側には学生自習室があり、真中のほうには検索システムや印刷機などが置いてあった。1階には中近東とイスラム関係や基本的な社会科学関連の図書、2階にはアフリカ、法律、考古学、芸術関連の図書、3階は東アジアコーナーで日本、中国、韓国関連の図書、4階には東南アジアコーナーと大型の定期刊行物、5階には標準サイズの定期刊行物と新聞類が配置されていた。

各階にはPCがそれなりに配置されていて、オンライン・システムのコンテンツは非常に豊富であった。日本に関して言えば、『ジャパンナレッジ』、『日経テレコム21』、『ヨミダス歴史館』、『聞蔵IIビジュアル』、『Zassaku Plus』などが入っていた。経済統計に関して言えば、先進国はもちろん関連地域の発展途上国の統計システムもかなり揃えてあり、羨ましい限りであった。

3階の東アジアコーナーには学術書だけで

はなく、歴史小説類もかなり収蔵されていて、幼い頃よく読んでいた『三国誌』、『水滸伝』や『林巨正』（韓国の歴史小説）などがずらりと並んでいた。所属教授のゼミナールで読む数式ばかりの英語ジャーナルでしょっちゅう頭がフリーズしたが、その時読んだ上記の小説の味は格別であった。

「古い古文書や図書そして新しくて豊富なエレクトロニクスのリソース」はさすがに東アジア研究者としては羨ましいものであった。しかも、学内にBruneiと呼ばれるギャラリーがあり、美術品や芸術に鈍感な私でさえも「さすがにイギリスだな～」と思うようになった。

同じロンドン大学のCollegeであるUCLとLSEの図書館や大英図書館も徒歩15分圏内で研究者にとっては最適な場所に立地している。また、図書館のすぐ隣には緑豊かなRussell Square広場があり、その芝生の上で自由に散策しながら“Imagine”を歌っていた学生たちとその隣で天真爛漫に遊んでいた可愛いリスたちが懐かしい。



「学生に勧めたい一冊」

村上 則 夫

(流通・経営学科・教授)



〈毎日、毎日、あらゆる面で、僕はどんどん良くなっている！〉

〈あきらめるな！ あきらめるな！ 絶対、絶対、あきらめるな！〉

このフレーズは、私が推薦するオグ・マンディーノ著『十二番目の天使』（坂本貢一訳、求龍堂）という作品に登場するリトルリーグチームの一員であるティモシー・ノーブル少年のことばである。

本作品は、妻と息子を亡くして、生きる望みを完全に失い自らの人生を拳銃によって終わりにしようとしていた男性、ジョン・ハーティングが一人の少年によって人生を再生するという勇気と感動の物語である。

ミレニアム・ユナイテッド社の社長であるジョンは、若くして地位と名誉と財産を得た。

しかし、その幸福も、愛する妻、サリーと最愛の息子、リックに起きた突然の事故死によって、一気に絶望のどん底に転落する。「日々是好日」という禅語がある。この禅語は、不幸や、結果の善し悪しにかかわらず、かけがえない一日一日を大切に、感謝の気持ちで過ごすことを説いたものである。しかし、あまりに突然で、はげしい不幸に見舞われたとき、自分の人生に感謝することは難しいだろう。物語のジョンは、まさしくその役柄である。

だが、ジョンは死ななかった。そして親友の誘いを受けてリトルリーグチーム「エンジェルズ」の監督を務めることになる。そして、このリトルリーグチーム（少年硬式野球チーム）に所属していたのが、男の子ながら身体は小さいが、あくまでも明るく元気な頑張り屋・ティモシー少年である。しかし、この少年は、過酷な運命ともいえる身体の障害を負っていた。

そして、この二人の交流をとおして、人生に何の意味もないと思っていたジョンの心の暗闇に、過酷な身体の障害を負ったティモシー少年の何にでも立ち向かう勇気と、けがれを知らない常に前向きな精神によって、光がともりはじめ、やがて、ジョンが「人間とし

ての人生」を取り戻すというストーリー展開である。

本書の物語の展開の舞台は、そのほとんどがリトルリーグチームだが、多少の野球ルールさえ知っていれば、まったく理解に苦しむことはない。少しでも読もうとページをめくると、いつの間にか自然に物語の中に引き込まれ、気がつけばとうとう最後のページまで到達していた、という作品である。なお、この作品を読むときは、涙をぬぐうためのハンカチの用意を忘れない方がよい。

著者のオグ・マンディーノは、1996年に亡くなるまでに十冊以上のベストセラーを世に出している、いわゆる「人生哲学書作家」であり、世界中に多くの読者を持っている。私自身も、翻訳本ながら、オグ・マンディーノの著作を数冊所持しているが、いずれの著作も、何度でも読み返してみたい衝動にかられるほど不思議で、かつ魅力的と評してよいだろう。

毎日、何もいいことがないと落ち込んだり、涙がでそうなほど悲しいときは、〈毎日、すべてのことが、私には良くなっていく！〉というフレーズを自分自身の心の中で、または小さく口に出して繰り返してみることをお勧めしたい。

「古い本」の話

荻原 寛

(経済学部地域政策学科・教授)

「古い本」の話である。「古本」の話ではない。ここにご紹介するのは、明治26年（1894）東京・小石川生まれの母方の祖父が残してくれた蔵書の一部だ。銀行お抱えの建築家だったが、大の芝居（歌舞伎）好きで、趣味の日本画で役者絵を描いたり、酒席で興が乗れば、七代目三津五郎あたりの声色を披露

したりした。そんな洒脱な祖父らしく、蔵書には岡本綺堂や河竹黙阿弥らの作品もかなり混じっている。もともと、朝食はトーストにエッグ・スタンドに乗せた半熟卵、マーレード、ミルクティー、食べ終えたところに迎える車が来るというモダン派だっただけに、伝統的な和の世界ばかりでなく、森鷗外が森林太郎の名前で活躍していたころの『塙太利近代現代劇集』や、永見徳太郎の『南蛮長崎草』までちょこんと入っているところが面白い。

祖父に限らず、根生いの江戸・東京の人間は山の手であれ下町であれ、常に「美の存在」

をかたわらに感じていたがる。江戸・東京に生まれ育ったわけではないが、加賀・金沢に鋳職人の子として生まれ、16歳で尾崎紅葉に師事するため上京し、一時帰郷するも亡くなるまで東京で筆を揮った泉鏡花は、紅葉譲りの江戸美学に裏打ちされた世界を独自の流麗な文体でつづり、多くの読者を魅了した。その「美」は製本にも及び、表紙の装丁に意匠を凝らしただけでなく、表紙の見返しも精緻な日本画で埋め尽くした。この「鏡花本」と呼ばれる本自体が美術品の単行本は、大正ロマン時代の日本を一陣の風のごとく駆け抜けたのである。

写真の二点は、泉鏡花作の『婦系図後編』（5頁の写真の左側）と『龍蜂集』（同写真の右側）だ。奥付を見ると、『婦系図後編』は大正4年、『龍蜂集』は同12年に発行されている。出版社は東京市日本橋通の春陽堂。森鷗外に同じく、著作者名は鏡花という号ではな

く実名の鏡太郎だ。西洋の書物にも、鋏まで打った豪華な皮の装丁や手描きの極彩色の挿絵などの贅が見られるが、表紙の見返しを一幅の絵にしておもうという発想は見当たらない。

この「庶民派美術品」を研究目的以外で気軽に手にとってみるのは、残念ながら図書館では無理だ。そんな時は「古本」屋がある。と言っても、まわりの汚れをごしごし落とし（布の装丁や天金はもうこれでアウト）、原価の半額で棚に並べ、それでダメなら105円均一にする全国展開の下流チェーン店の話ではない。昔ながらの「古本屋」の話だ。そこは内容や装丁、発行部数など様々な価値が本を支えていて、稀覯本がちゃんと生き延びられる。東京・神田には世界に二つとない不思議な街がある。神保町の古本屋街だ。書店や出版社も軒を並べ、目からうろこの体験が待っている。学生の内にぜひ一度は行こう。





佐世保校附属図書館の県民登録者の動向について

阿部 律子

(長崎県立大学佐世保校附属図書館長)

2011年2月発行の『図書館だよりNo.15』でも、「地域に開かれた大学図書館を目指して」というテーマで、長崎県立大学佐世保校附属図書館の地域開放について書きましたが、今回はその具体的な数値について、少し紹介させていただきます。

長崎県立大学（現長崎県立大学佐世保校）附属図書館は、他の公立大学附属図書館に先駆けて、平成3年から県内在住の18歳以上の方に図書館を開放しました。そして、平成5年からは、2週間に3冊の図書の貸し出しも始めました。平成17年度からは利用者の年齢を18歳以上から15歳以上に引き下げましたので、高校生や専門学校生も利用することができるようになりました。こうして地域開放してから今年度で22年目を迎えました。

キャンパスが佐世保市の中心部に位置していないという地理的条件もあり、県民登録者に劇的な変化はありませんが、毎年300名以上の県民の方々にご利用いただいております。ここ数年来登録を更新する人の数が、新規登録者数を上回っているのが特徴としてあげられます。例えば、平成23年度は333名の県民登録者のうち、新規登録者は139名でしたが、更新者は194名でした。今年度も12月14日時点で、新規120名に対して、更新が156名となっております。これらの数値から、地域開放が次第に定着していっていることがうかがえます。また、家族の一人が最初に登録し、次に家族の別の方を誘うということがあるようで、ご夫婦や親子、兄弟姉妹で利用されている方々が10組以上見受けられます。ご夫婦で登録の方の年齢層も、大学図書館の蔵書の幅広さを反映するかのよう、20代

から70代までと大変幅広いのも特徴的です。仲良くご夫婦で図書館にいらっしゃっている姿を目にしたこともあります。また、備考欄に「〇〇さんの紹介で」と記されているところから、友人知人から紹介されて、大学図書館を利用し始めた方もいらっしゃるようです。また、近隣に在住している卒業生も、県民登録に切り替えて利用しています。

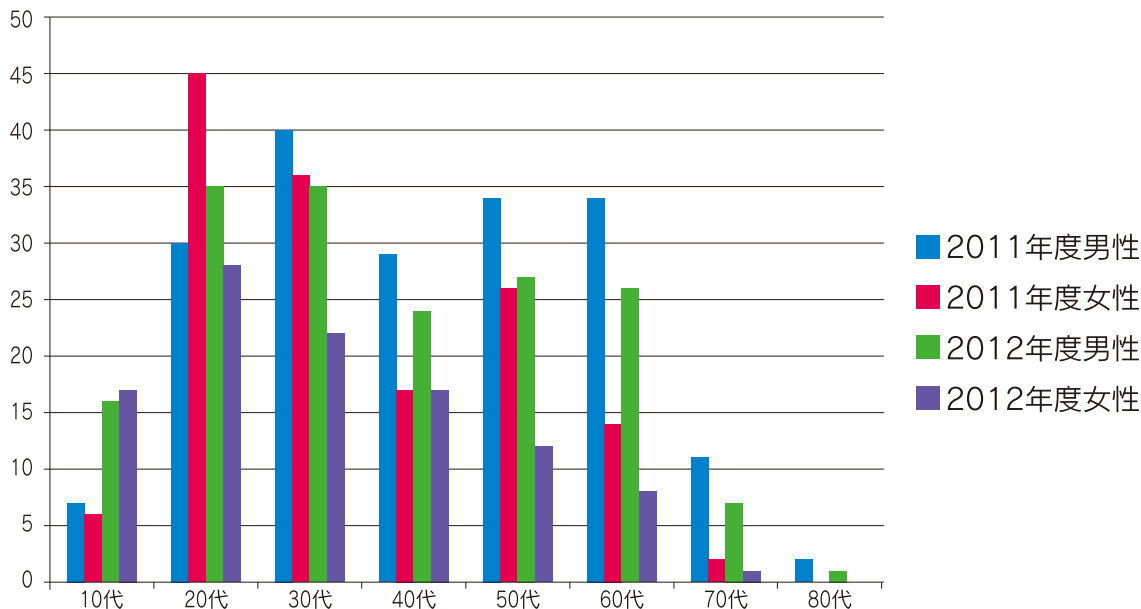
2011年度には佐世保市以外の市町村の利用者は47名を数えましたが、島原市や長崎市、長与町からの利用者もあり、そのうちの多くが2012年度も更新していただいています。また、学部（経済学部）の特徴から、社会科学系の蔵書が充実していることもあり、小・中・高・専門学校あるいは特別支援学校などの先生方から授業のためにご利用いただいているだけでなく、保険労務士事務所や年金事務所に勤務の方、税理士行政書士事務所経営者や税理士事務所勤務の方、各地方自治体勤務の方、地方裁判所勤務の方や法律事務所経営者の方々にも専門図書やさまざまな資料を活用していただいています。また、各種国家試験や資格試験の受験のために来館されている方々もいらっしゃいます。もちろん、勉強や研究・調査に疲れたときには、その時々ベストセラーも揃えていますので、気晴らしの読書をすることもできますし、DVDやビデオ、あるいはCDで気晴らしすることもできます。

それでは、どのような年代の方々に利用されているのか、グラフで示してみましょう。2012年度については、12月14日現在の数値であり、2013年3月までの数値が欠如していますので、全体数が少ない点に注意が必要ですが、それでもグラフの数値からいえるのは、意外にも20代、30代の利用者が多いことです。一般に大学図書館は近寄りがたいと思われがちですが、22時まで開館していて利便性が高いこともあり、昼間の利用だけでなく、学校帰りや仕事帰りに利用いただいております。

す。そして、昨年から少しずつですが、10代の利用者が増えていることも大きな特徴としてあげることができるでしょう。夕方、制服を着た高校生をよく見かけるようになりまし

た。特に受験をひかえた高校3年生が、勉強している姿を見かけます。静謐な環境が好まれているようです。

年代別県民登録者数



来年3月には春休みの期間限定で、初めて中学生にも図書館を開放する予定です。これからも、より多くの県民の方々に気軽に

利用される大学図書館を目指して我々図書館スタッフ一同努力してまいりたいと思っております。

読者フェアをやろうとした経緯

長澤華奈

(地域政策学科・2年)

自分は小さいころから本を読むことが好きで、高校生まではよく図書室に入りびたり毎日何かしらの本を借りて読んでいた。学年で最も多く読書をしたとして表彰されたこともしばしばあった。

本好きの私だが、大学生になって実際のところ毎日が忙しく、読書がまったくできてい

ないのが現状である。私のようにまだ本に興味のある人ならともかく、活字が苦手な人が読書をする時間はなおさら少ないだろう。また自分の周りでも増えてきているのが電子書籍やスマートフォンを持っている人たちである。これらの台頭により書籍という紙媒体を手取る人はさらに少なくなっていると考えられる。

長崎県立大学附属図書館は28万冊以上の蔵書数を誇る。そのように多くの本に触れる機会はなかなか無いのに、生かしていない学生が多いのはもったいない。きっかけはどんな本からでもいいので今までより沢山

の本を読み、自らの見識を深めてほしいと思ったのがこの「読書フェア」をやりたいと思った最初のきっかけである。



図書館のスペースを一部お借りし毎週テーマに沿った蔵書を紹介している。最初の週は《メディアミックス》と題して映画化やドラマ化された本を取り上げ、まずは本に興味を持ってもらうところから始めた。本が苦手な人でも、自分が見たことのある映画の原作だったら読んでみようと思い、手にとってくれるのではないかと考えたからである。その後の週は大学生として時事問題に強くなってほしい、知識を蓄えてほしいとの思いから《新書》、これからいよいよ本格的になる就職活動を応援したい、また今年ではなくとも来年再来年に向けて今のうちから準備をしてほしいとの思いから《就職活動》、だんだん寒くなり家にいる時間の多くなる冬だからこそたくさん読書をしてほしいとの思いから《冬休みに読んでほしい本》というテーマで学生のことを一番に考えた本を紹介している。図書館に来る多くの人の目に止めてもらえるようにスぺ

ースのレイアウトも自分たちで考え、飾り付けを行った。フェアが行われている現在、図書館に足を運びこっそり様子を観察していると、紹介している本が貸し出されていたり、興味を持って本を眺めてくれている学生の姿を見て、フェアを行ってよかったと心から思う。

以前部活動の一環で教授の方々に「大学生のうちにやっておくべきこと」をインタビューする機会があったのだが、どの教授に伺っても必ず言われたのが「読書」であった。自分たちが考えていた見識を深める以外にも、読書をすることでコミュニケーション力を高めたり就活にも役立ったりと大学生に必要な力が身につくのである。また小説や物語では自分では体験することができないようなことを追体験することができ心が豊かになる。図書館にはそれを叶えられる本が28万冊以上も置かれているのだ。読書フェアを機会により多くの学生に来てもらい、読書を通して自分を成長させて欲しい。



◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/lib>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで（学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで）
土曜日：午前9時～午後5時まで
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日（6/4）

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2013年1月25日